

再録——日本的靈性とダーウィニズム (2006/11/15)

Greatchain

2019/09/11

(これは 13 年前の旧稿で、「人間原理の探求」という題で、ある雑誌に書いた連続エッセーの一篇だが、その一部を引用するつもりが、結局、全文を引用することになってしまった。おそらく冒頭の世論調査も含めて、世界の事情は、ここに書いたことと基本的に、変わっていないのではなかろうか？ この 13 年の間に、インテリジェント・デザインが、ダーウィニズムを圧倒的に押しつけたにもかかわらず、わが国ではビクともしないように見えるのは、何と奇妙な、滑稽な光景であることか?)

雑誌「サイエンス」2006 年 8 月 11 日号に、進化論受容度の国民別の統計グラフが載っている。それによると 34 カ国中、アメリカ人が（トルコに次いで）最も進化論を拒否する国民であり、日本人は最も易々とこれを受け入れる国民の、上位 5 カ国に入っている。「サイエンス」誌はプロ・ダーウィンだから、アメリカの方に問題があるように言っている。さてこれをどう考えるか？

日本国民は総じて、アメリカ人よりも「科学的」で、すぐれた国民なのか？ イタリアの遺伝学者ジュゼッペ・セルモンティは、後世の歴史家は、現今のダーウィニズム専制体制を「20 世紀のビッグ・ジョーク」として位置づけるだろうと言っている。私などはこれを「ビッグ・ジョーク」である上に、「ビッグ・クライム」あるいは「ビッグ・シェイム」であったと言いたい。

数学者の岡潔（1978 年没）という人は、晩年、かなり精力的に講演活動を行ったが、その一つにこんなことを言っている——「東洋では自然を無生物だなどと思ってやしない。これは直観なんでしょうね。老子の自然学というものは、自然を無生物だなどと思ってやしませんし、日本の古事記だって国は神が生んだとして、生物と無生物の間に区別を置いていない。これが正しいでしょう。これは直観でしょう。西洋人だけが無生物だと思ってしまうんですね。欧米人は無生物から生物が生まれる、と、無生物が生物を生む、つまり体が心を作るといふ風にしか思えない。それから五感で分からないものはないとしか思えない。この二つの非常な間違いを初めから持っているんですね。」

岡潔は「西洋人は馬鹿だから」と繰り返し言い、その馬鹿な西洋人の真似をしなければ利口になれないと思っている日本人が歯痒くてしょうがない、というようにしゃべり続ける。西田幾多郎も「物質から生命は出てこない」としきりに繰り返しているが、これは当たり前のことで、物質から生命が出てくるというような低級な怪奇小説じみた唯物論が、次第に幅を利かせるようになったので、何度も念を押さなければならなかったのだろう。ところが我々の生物教科書は当然のように、「生命は物質から発生する」と教えている。

ダーウィニストの総帥というべき（故）スティーヴン・J・グールドは、かつて、「生物学は神の似姿としての人間の地位を、自分の手に奪い取った」と言った。これを真に受けて、自分の命はどこから来たのか、生きているとはどういうことか、といった問題を考える人が、岡潔や西田幾多郎は信用できないから、ハーバードのグールド先生やオックスフォードのドーキンズ先生のような「専門家」にお伺いを立てるとしたら、お門違いも甚だしいというものだ。

我々は鈴木大拙の言った日本的靈性というものを持っている。生命を物質や物力で説明するような心性を初めから持っていなかった。「君の言う生命観は立派かもしれないが、それは科学的に通用する話ではないだろう」と、20年前までなら言えたかもしれない。今はもうそんなことは言えなくなった。

我々の生きている（宇宙にたった一つの）この地球の環境も、時空的宇宙そのものも、すべてが生命のために、驚異的な精度でデザインされたもの、いわば厳密なデザインのネットワークであって、「自然を無生物だなどと思う」ことが間違いであることが立証されている。まさに「国は神が生んだもの」であり、比喩的に言えば、この時空的宇宙のどこを切っても血が出るのである。しかしこれを認めない「西洋人」一派と、彼らに付和雷同する東洋人がいるのが現状である。

日本人のダーウィニズム受容とその民族性という話になると、私の頭からどうしても離れない一文がある。出隆（いで・たかし）訳のアリストテレス『形而上学、下』（岩波文庫、1961年初版）の、訳者解説中にそれはある——「人類が猿類から発生したとは知らず、〈人間だけが人間を生む〉と確信していたアリストテレスは、人間はその肉体よりも靈魂の方が、概念的・目的論的に優先的であり根源的である…などと言っている。」

アリストテレスの目的論的世界観が、やはり正しかったのではないか、というアリストテレス見直しの機運が高まっている現在これを読むと、時代の差があるとはいえ、アリストテレス研究の第一人者が何ということを書いてくれるのだ、と言いたくなる。「…とは知らず」とはひどいではないか。せめて「…という説のあることを知る由もなかったアリスト

テレスは」と言ってほしかった。まさに言葉尻を捉えてこんなことを言うのは出隆氏には悪いが、こうしたちょっとした言葉遣いにこそ、本性が現れるように思われる。要するに、無批判的受容ということである。私には、この言葉遣いに現れているようなダーウィン進化論の無批判的受容が、日本人の態度を代表するもののように思えてならない。

——以上